

燃料溶融 津波4時間後

翌朝注水 直後に大半崩落

福島第一1号機

東京電力は15日、福島第一原子力発電所1号機で起きた「メルトダウン（炉心溶融）」は最近起きたものではなく、同原発が津波に襲われた約4時間後の3月11日夜に始まったとする分析結果を公表した。東電が注水を開始したのは、炉心溶融が始まってから10時間以上後の翌12日朝で、事故に対する東電の初動が遅れたことがデタから裏付けられた。△3号機ホウ酸注入2面▽

4号機爆発 3号機の水素流入か

東電は、中央制御室で地震直後から記録されたデータなどを基に、津波が襲来した3月11日午後3時30分頃から原子炉の冷却機能が働かなかったと仮定し、原子炉の炉心温度や水位を推定した。その結果、当初約300度だった炉心温度は、

11日午後6時過ぎから急上昇し始めた。それに伴って、燃料最上部から約5以上に

●1号機原子炉の水位変化



あった原子炉の水位も、津波から約4時間後の11日午後7時30分頃に約10m低下し、全燃料が水面から露出し、燃料が燃料容器の底に落下し始め、炉心溶融が始まった。11日午後9時には、炉心温度が燃料（ペレット）自体が溶け始める2800度に達し、注水開始直後の12日午前6時には何らかの理由で圧力容器に穴が開き、水位が急落した。津波襲来から約15時間20分後の12日午前6時50分には、核燃料の大半が原子炉圧力容器底部に崩落した状態になった。

一方、東電は15日、4号機で起きた爆発（3月15日）は、隣接する3号機で放射線物質を含む蒸気を放出する「ベント」をした際、流れ込んだ水素が原因である可能性があるとする分析結果も示した。4号機も、3号機と同

様、水素爆発が起きたことになる。3号機で事故直後に実施した、圧力容器内の水素を含む蒸気を抜くベントの際、水素が4号機に流入したことが考えられるという。

震災被害状況

死者 1万5057人
行方不明 9121人
避難者 11万6372人

15日現在、警察庁まとめ